



茨城県海外子女教育
国際理解教育研究会
2009年度 広報誌 1

会 長 あ い さ つ

国際理解教育の実践と組織

茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会
会長 大塚 雅夫

現在国際情勢は、世界同時不況により不安と変化が入り乱れている状況である。日本は貿易立国でありながら、外国と海を隔てているため危機感に乏しいのが現状である。今の高校生や大学生を見ていると、平和ぼけしており、自由と権利をはき違え、自分だけがよければいいという雰囲気を感じられる。これでいいのであろうか。

日本をここまで発展させたのは、現在70歳から80歳の年齢の方々が、戦争で友人を失い、戦友からの遺言から子孫のためにも歯を食いしばって、努力した結果が現在の奇跡的な繁栄につながったのだらうと思われる。しかし、勤勉や誠実などの言葉が消えつつある現在、このままでは将来の日本は危ないと思っているのは、私だけではないと思う。

そこで、在外教育施設で貴重な体験をした私たちの役割を發揮すべきときが来たのではないかと思う。私たちは、海外での教育や生活を通して、現地の外国人から直接学び、肌で感じている。それを学校の教育活動を通して児童・生徒たちに伝え、外国との交流や日本での国際理解教育を通し、国際社会に貢献できる日本人を育てていくことが急務である。

しかし、ここで疑問がある。私たちの会で壮行会を実施し、不安と期待で胸をふくらませて任地に赴任し、そして一回りも二回りも大きくなって帰国し、帰国報告会で任地の海外教育事情を発表する。問題は、その後である。帰国の歓迎会には出席するが、その後こちらの会には参加しない先生がいるのである。自分自身を振り返ると、学校では、自慢話をするみたいで遠慮し、海外での貴重な実践を話さない。学校での同僚も毎日の生徒指導や授業などで忙しく、自分に海外のことを聞くこともない。そのうちに自分自身もよい

思い出くらいになってしまう。これでよいのであろうか。

そこで、俗称「茨海研」という組織があるのである。水戸は遠いので、近くならば出席しやすいという会員のために、5年位前から水戸、県北、県東、県南、県西と5ブロックに分かれて支部会が発足したのである。支部なら知り合いがいるので、出席しやすいということで、参加者も多くなり、参加率も定着してきたようである。海外での体験を30分位かけてじっくり発表してもらっている。その後の懇親会も交流がはかれています。

昔は、日本人学校に行くのは、変わり者などと言われたことがあった。それは、つい5年位前の関プロ茨城大会で私自身、事務所の行政を経験した方から言われたので、鮮明に覚えている。

しかし、今は違う。在外への派遣者も、毎年20名近く派遣し、勤務実績もよく、文部科学省からも感謝されている位である。帰国した会員数も300名に達しようとする位組織が大きくなり、しっかりとしたものとなってきた。文部科学省も、海外子女教育の時代から、帰国してからの経験を生かした国際理解教育に重点を移してきている。私たち経験者は国の貴重な宝、海外との橋渡し役として見られている。

4年位前から、夏に海外子女教育・国際理解教育実践研修会を開催しているが、昨年度よりJICA筑波を会場にしている。本年度より、JICAの後援をいただけることになった。前進である。JICAの所長も国際理解教育の実践なら後援するというので、了解をもらった次第である。ありがたいことである。県の義務教育課とも連携が進み、5月の帰国歓迎会には、宮本課長、森田管理主事、

藤田指導主事の先生方が出席してくれた。

いよいよ、これからである。海外での貴重な経験をもった私たちが組織を生かし、日本の発展、国際社会に貢献できる児童・生徒の育成のために励まし合い、刺激し合って貢献

していきましょう。決して学校に閉じこもって貴重な体験を思い出に終わらせないように、会には進んで参加して交流や親睦を深めていってください。

顧問の先生のあいさつ

日本人学校のよさを国内の学校に

茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会
顧問 小出 治夫

会員の皆様いかがお過ごしでしょうか。それぞれの勤務地で益々ご活躍のたと存じます。

帰国して長い年月がたった方、また帰国して間もない方、時間の経過の違いはありますが、在外教育施設での勤務を経験したのものとして、在外への思いはいつも心の片隅に残っているのではないのでしょうか。自分の経験を何らかの形で生かしたいとだれもが思いを募らせている中、本研究会の活動は年を重ねるごとに充実してきており、研修会等への参加も年々増加していることは喜ばしい限りです。役員の皆様方の献身的な活動に心より感謝申し上げます。

私が所属する関東地区の支部においても、壮行会や歓迎会を兼ねた研修会が毎年開催できるようになり、今までともするとバラバラであった会員相互が、研修会を通じて毎年情報交換できるようになりました。会員一人一人の先生方が在外での経験を生かせる場として、さらなる本研究会の活動に期待したいと思います。

さて、私的なことになりましたが、以前勤務していた在外の地を6年ぶりに訪問する機会を得ました。マレーシアのコタキナバルでは、日本人学校も訪問することができ、熱帯雨林気候の中で暑さに負けず学校生活を送っている子どもたちの姿に触れ、元気いっぱいのエネルギーをもらって帰国することができました。住み慣れた地への訪問や現地に住んでいる方と親交を深め旅愁に浸るのも訪問目的の一つでしたが、何よりも一番のおみやげは日本人学校のよさを再認識することができたことでした。

その1つは、先生方がゆとりをもって子どもたちの指導に専念していることです。その原因を探ってみると、日本人学校では対外的な出張等が皆無であるということが言えると思います。児童生徒が学校に来ているときは、

教師は学習指導や学校行事を含めてこれらに専念して、余裕をもって指導ができるシステムができているということでした。国内においても長期休業日等のみに出張や研修会等は実施できないものかと再認識させられた次第です。

2つめは、子どもたちの体験活動が豊富に実施されているということでした。今、日本国内においては、ゆとり教育が見直され学力という声が強調されていますが、私が訪れた日本人学校では、子どもたちが自ら考え、体験し、発表するという体験活動が数多く取り入れられていました。そのいくつかの活動を紹介しますと国語の表現力を身につける活動では、街に出かけて発見したことを詩や作文、俳句、短歌等に表現する活動、また、英語の学習では身につけた英語を実際に使う場として、街に出て人々にインタビューする活動、夏休みには、小1から中3まで一人一人研究し、休み明けには「夏休み体験学習発表会」と銘打ってだれもが保護者やみんなの前で発表すること、また、総合的な学習では学年末にだれもが年間を通じて研究したことを発表する機会をもつことなど体験的な活動が豊富に実践されていることでした。学校行事の中でも自然体験活動がふんだんに取り入れられています。その1つには、小1から中3まで参加する野外キャンプ活動があげられます。不便な中にも子どもたちが工夫を凝らして実施するこの野外活動は、どの子も一番の思い出になるくらい楽しい行事の一つのことです。もちろん学習指導も十分指導されていました。例えば小学校低学年では週8時間の国語の授業が行われていることから見てもわかります。

これらの活動が実施できるのも派遣された教員の力量によるところも大きいですが、一番は学校教育のシステムによるものと思います。在外で経験した派遣教員の先生方は、日本人学校のよさを是非国内でも生かしていただきたいと思います。そのためにも本研究会が中心となり、これからの日本を担う子どもたちのために少しでも「変えて」欲しいと願っています。

本年度帰国された先生方からの報告

シカゴ日本人学校の勤務を終えて

前シカゴ日本人学校
取手市立藤代中学校 飯塚 良晴

多くの出会いと別れがあり、あっという間とを感じる反面、あまりにも多くの体験をし、とても充実していた3年間でした。中学部国語科として勤務していましたが、小学部1年生から6年生の学級や他州の補習校で国語の授業ができたのも、今ではいい思い出です。国語の授業を通して、日本語そして日本文化の良さを伝えていったつもりです。今頃になって、アメリカ合衆国という異文化圏で日本語を教えることの大切さを痛感しています。



1 シカゴについて

(1) 摩天楼の国際都市

シカゴというとギャングの街のイメージがあるかもしれませんが、それは昔のこと。現在ではシカゴ市警の努力により、とても治安の良い街になっています。そして今ではオバマ大統領の本拠地、2016年のオリンピック候補地としても注目されています。



全米第3位の人口を誇るシカゴは、ミシガン湖の南西に位置しアメリカの中西部に属しています。四季はありますが春秋は短く、夏は暑く冬の寒さはとても厳しいです。冬季には年に数回、華氏0度（摂氏マイナス18度）を下回ることもあります。

古くから交通・物流の中継地として栄え、国際ビジネスの一大拠点となっており、日本企業も数多く進出しています。高層建築が建ち並ぶこの街は摩天楼発祥の地として知られています。各時代を代表するさまざまなビル

が林立し、街全体が建築物の博物館の様相を呈しています。

(2) 現地の教育環境

アメリカ合衆国は州によって義務教育期間が異なり、小学校に相当する学校としてエレメンタリースクール、中学校はジュニアハイスクールとミドルスクール、高校はハイスクールなどがあります。シカゴに在住して小中学校に通うとき、大きく分けて2つの選択肢があります。英語力をつけることを第一に考えバイリンガルを目指して現地校に通う方法と、日本人としての学力や国際人としての資質を身につけることを重視し、日本人学校に通う方法です。

現地校から本校に編入学してくる児童生徒は、英語を聞いたり話したりすることはよくできますが、日本語が不安定な場合が多いです。帰国後の状況を考えた場合、母語である日本語が確立していないと、日英ともに言語能力が中途半端になる可能性も充分あります。「ここはアメリカなのだからまず英語を」という保護者の思いはよくわかりますが、その子の年齢や性格、学習能力に応じた学校選択の判断が求められます。

2 シカゴ日本人学校の特徴

シカゴ日本人学校は、1978年にシカゴ日本商工会議所（JCCC）によって設立され、シカゴ双葉会によって運営されています。昨年はちょうど創立30年を迎えました。シカゴの北西部に位置するアーリントン市にあり、地域住民や関係諸機関の支援や協力を得ながら、全校児童生徒約160名が明るく元気に学校生活を送っています。また、昨年は、幼稚部が設立され、約20名の園児も同じ校舎で生活しています。

ここアメリカの地に即した特色ある教育として英語教育、現地校との交流学習、各種社会見学等を行っています。

英語教育では、4年前から小学部1年生～3年生で「英語による遊び活動（キッズプログラム）」を導入しました。この活動のねらいは、子どもたちが体全体を動かすことによって、より自然に英語と触れ合い、学びを身につけることにあります。小学部1年に関しては、英会話を合わせると週5～6時間も英語にふれることになり、欧米の各日本人学校でもあまり例を見ない特色ある教育活動といえます。また、小中学部においてアメリカ社会等の授業を現地採用教員が英語で実施しています。

現地校との交流学习では、現地アメリカ社会の理解や人間的な触れ合いができるようにしており、児童生徒の楽しみの一つになっています。

日本国内では英語教育に対してさまざまな意見が飛び交っていますが、本校ではアメリカの地における英語教育を「生きる力」であることから、核をなす教科として今後も強く推進したいと考えています。

シカゴ日本人学校はイリノイ州の私立学校として登録されており、アメリカの現地校へ進学する生徒もいます。シカゴ日本人学校の充実した学習内容は、将来日本に帰国する児童生徒にとっても、恵まれた自然環境と合わせて、最適な教育環境であるといえます。



3 中学部の教育活動

幼小中が同じ校舎で生活することから、模範的な態度や行動、思いやりの気持ちを大切に、リーダー的な存在となる中学部生徒の果たす役割は大きくなってきました。「世界に誇れる日本人学校」を合言葉に頑張っている中学部の活動の一端を紹介します。

(1) 朝の活動で調和のとれた生徒に

1日のスタートは「元気なあいさつ」から始まります。中学部生徒全員が毎朝、元気なあいさつで小学生を迎え、活気のある学校生活を送っています。朝の15分間の活動として、月曜日には読書、火・木曜日にはマラソン、水曜日には生徒朝会、金曜日には小テストと毎朝目標をもち取り組んでいます。「継続は力なり」。続けることにより知力や体力、そして生きる力が付いてきています。

(2) 多彩な行事でリーダー性を身に付ける

1年を通して3つの委員会（実行委員会・文化委員会・運動委員会）が中心となり企画・運営する多彩な行事があります。新入生歓迎会から始まり、春と秋の校外学習、運動会、修学旅行、文化祭、駅伝競走大会、百人一首大会などの行事を通して、生徒たちはリーダーとしての資質の向上を図るとともに、協力することの大切さなどを学んでいます。週に1度、委員会ごとのランチタイムを実施し、昼食を食べながらも学年の分け隔てない話し合いが行われています。



(3) 進路学習・交流学习で自己を高める

進路学習の一環として職場見学を行い、「働く」とは何かを知るとともに自分自身を見つめるきっかけとしています。さらに「現地の高校を知る」学習として、現地のハイスクールに行き、授業に参加したり、見学したりもします。

また、国際理解教育の一環として交流学习があります。現地校（トーマスミドルスクール）に行き、授業やゲームなどを通して交流し、アメリカの文化・習慣・学習システムを学びます。本校に招待するときは日本の文化・風習・歴史等を英語で紹介します。異文化体験や現地の中高生と出会い、交流を通して見識を深め、自己を高めています。

(4) 伝統の「シカゴソーラン」「和太鼓」で団結する

シカゴ日本人学校で脈々と受け継がれているのが「シカゴソーラン」。さらに、2年前からは「和太鼓」も加わりました。発表の場は地域のJapan Festival、文化祭、交流学习などです。「シカゴソーラン」「和太鼓」の良さは、日本の文化を学び継承していくとともに、集団活動を通じて、仲間づくりができる点にあります。毎年、先輩が後輩や新しい編入生の指導をする中で、お互いの信頼関係が増し、共通の目標に向かって団結する力を身に付けています。

おわりに

中学部の生徒には、機会あるごとに『たくましく知識人』ということを話してきました。たくましさは、身体的な面と精神的な面の両面で、今、国際社会で求められていることではないでしょうか。ルイ・アルゴンの詩に「教

えるとは、ともに未来を語ること」という一節があります。これからの未来に夢をもち、そのために努力をし、能力や可能性をのばし、自分らしさを発揮して行ってほしいと思います。そして、児童生徒の皆さんが国際社会で信頼され活躍できる日本人になることを期待したいと思います。



3年間の勤務を終えて

前サンホセ日本人学校
筑西市立大田小学校 吉村 俊一

1 コスタリカ共和国について

まず、コスタリカ共和国については、右表のあらましを日本と比較しながらご覧いただきたい。ちなみに、この表は、平成17年度(2005年)に職員で作成した「資料集コスタリカ」より抜粋しております。

(1) 歴史

中米の国コスタリカは、周辺国同様、大航海時代にコロンブスの上陸によって、それまでの文明が衰退し、植民地として1821年までスペイン領となっていた。独立後、アメリカ合衆国の政治的・経済的影響を受けながら、内戦等乗り越え、1983年には、軍隊放棄をし、中立宣言を成し遂げ、現在も平和的な国家として歩み続けています。

(2) 産業

コスタリカの主要産業といえば、コーヒー、バナナ、サトウキビでしたが、現在ではハイテク産業や観光が大きな産業となっています。中でも、大きな話題をよんでいるのが、エコツーリストです。映画「ジュラシックパーク」の舞台となったココ島もコスタリカの島です。

エコツーリストを魅了する自然の豊かさは、約50万種におよび生物が生息する豊かな熱帯乾燥林や熱帯雲霧林、熱帯雨林であり、それらの多くは、国立公園や生態系保護区となっています。その割合は、国土の

実に25%に及びます。

【コスタリカ共和国についてのあらまし】

1 位置 / 国旗		
2 国名		
コスタリカ共和国	日本語名	日本語
Republic of Costa Rica	英語名	Japan
サンホセ San Jose	首都	東京 Tokyo
約150万人(2005年推計/推定)		約1.2億人(2002年推定/推定)
1821年9月15日 スペインより独立	独立年月日	4世紀ごろ大和朝廷成立
1948年11月2日	国連加盟	1964年12月18日
3 国勢		
約430万人(2004年推定)	人口	約1億2700万人(2002年推定)
1.81%(2002年推定)	人口増減率	0.15%(2002年推定)
75人/㎢(2002年推定)	人口密度	336人/㎢(2002年推定)
79.32歳(2002年推定)	平均寿命	約71歳(2002年推定)
スペイン語97%、アフリカ系、インドネシア、中国人	民族	日本人99.2%、アイヌ人、朝鮮人、中国人
スペイン語(公用語)	言語	日本語
カトリック85%、福音プロテスタント14%	宗教	神道+仏教86%、キリスト教9.7%
4 地勢		
国土面積 5万1,100km ² (九州の1.4倍)		
気候 中央部は平均気温1,000mのメテオとよばれる国産自動車があり、カリブ海は北東部に太平洋が開け、太平洋は海が深い。各地の気候には火山からなる自然があり、自然環境が豊かである。		
主要な山脈は西から東へ1,800m以上のグアラカサス山脈、チカランタ山脈と続き、東西に走る中央山脈に連なっている。		
5 気候		
国境を熱帯性気候で、太平洋側は乾燥、カリブ海側は高温多湿で年間降水量は3,000～4,000mmに達し雨期を形成している。高層部は温帯でサバナ気候から高山気候まで多種であり「中央成気候」とよばれている。12～4月が雨季、5～11月が雨季である。		

(3) 人々の生活

全体的に明るくのんびりしているのが、コスタリカの人々です。朗らかで話し好きな姿は、公園や街角、自宅前でよく見られます。レディーファーストや家族のきずなを大切に感じる精神を感じる光景がいたるところで見られます。



熱帯雲霧林



標高1200mのサンホセ

残念なことに、最近では、銃や麻薬等に係る凶悪犯罪が増加の一途をたどっています。気候と共に、治安の良さからも「中米のスイス」と謳われた時代は、過去のものとなりつつあります。

そんな中、平成20年には、在コスタリカの邦人数は、500人未満でした。しかしながら、日本への興味・関心の高さは、ショッピングモール内にあるアニメ・マニアショップの出現や日本食レストランの増加として表れていました。

2 サンホセ 日本人学校について

(1) 概要

1974年に創立。今年で35周年を迎える。一時、70名を超える児童生徒数も年々減少していきましました。しかし、職員と子どもたち、保護者の関係は、小規模校ならではの家族のような雰囲気です。本年度、職員数7名（現地常勤講師1名を含む）、小学部15名、中学部2名、計17名でスタートした。不況による企業撤退等が大きな原因の一つです。現在は、児童生徒のほとんどが、現地在住者と職員の子も達によって構成されています。



学校の全景



学校のシンボル ポロの樹

(2) 特色

日本の教育課程に沿って、現地事情を踏まえた教育課程の工夫がされています。バスによる登下校のため、小学校1年生から中学校3年生までが6校時終了まで学校で過ごします（ただし、小学部では、空き時

間を設け、授業時間を調節している）。7時25分の清掃に始まり、お弁当の時間を経て、全校帰りの会の後、3時に下校します。

少人数であることをいかした、きめ細やかな指導と共に、職員削減を補うための複式授業など、学習形態の工夫なども積極的に



複式授業（算数）

手前：小3，奥：小4

を行っています。また、児童生徒会も組織し、子どもたちの自治の力を伸ばしたり、活躍し称賛されたりする場を設け、生き生きと学校生活を送れるよう工夫しています。

学習指導の工夫等

複式学級

複式授業

（普通教科：2学年，芸術教科：小学部及び中学部，語学：習熟度別，全校体育等）
補充学習の時間（クラス帰りの会25分中10分間）

全校参加計算チャレンジ（毎週月曜下校前，授業内等），漢字チャレンジ（授業内，家庭学習等）

短詩（俳句，短歌）づくりを通しての表現活動

作文指導（海外子女文芸作品展出版，作文発表会）

全校帰りの会における発表の場づくり

児童生徒会活動

委員会活動

小学校1年生から中学3年生までが委員

委員会主催の行事

（こいのぼり集会，豆まき集会，読書感想文コンテスト，コーヒーの栽培）

クラブ的活動【名称：ポロの樹タイム】

（一輪車，和太鼓，ダンス，運動，工作・実験等）

また，日本国外にある特性をいかして，英語だけでなくスペイン語の学習にも力を注いでいる。同時に，現地理解教育として，現地の学校や団体や日本人会の方々との交流も盛んです。

選択語学（日本語，スペイン語，英語）

現地交流等
冒険家
大場満郎さん
の地球立
て周り一
周の旅の
応援
現地交流
校の体育
祭への参
加
交流授業
(芸能教科)



現地校文化祭にて
よさこい鳴子踊りを披露

コスタリカ民族舞踊の鑑賞と体験
現地校文化祭からの招待
大使館主催「日本週間」への参加
コスタリカ独立記念日パレードに参加
日本人会合同運動会
社会見学（現地博物館，公共施設，日本企業工場等）
宿泊学習（コスタリカの自然や産業をテーマに）
インターナショナル・デーの開催（自他文化調査学習の発表会：総合的な学習より）

3 日本人学校での経験を通しての成果

(1) サンホセ日本人学校においてできたこと

基本的な生活習慣徹底のための指導
計算プリントによる繰り返し学習の継続（計算チャレンジ）
自主学習推進の支援
補充学習の継続
短詩指導の継続
学び合い（伝え合い，表現力向上）の意識高揚
学校紹介ビデオ作成の簡易化
視聴覚機器の活用



理科自由研究発表プレゼンのナレーション入れ

(2) 現地に行ったからこそできたこと

一人ひとりとして
しっかり向き合う
心構え
複式授業の指導法及び学び合いの雰囲気作り
互いを認め合う心の育成
個に応じた指導



自主学習や学び合い等を振り返る教室環境

多様な考えや価値観を受け入れようとする意識

国際理解教育の在り方と共に日本人としてのアイデンティティについて考えること

4 課題

課題は，いかに上記の成果を日本国内の学校でいかせるかという一言に尽きる。帰国して，新任校にて勤務を再開したが，サンホセ日本人学校の実に40倍の大きさを誇る大規模校の中で，自身の経験をいかすことの困難さをこの4ヶ月で痛感しました。多忙，不慣れ，環境の違い。これらは，派遣前にも，当然あるものだと思いをしていたつもりでしたが，やはり，現実には厳しかったです。

今は，とにかく，新しい環境に適応し，4年間の日本人学校の派遣での経験をいかせる土台づくりをし，一つでも多く実行することが，遠く離れたサンホセ日本人学校で今も頑張る児童生徒に応える何よりのことだと強く感じています。

5 おわりに

サンホセ日本人学校への派遣は，公私にわたり私に大きな影響を与えた素晴らしい経験でした。特に，派遣期間中，日本の教育現場で話題となった「モンスター・ペアレンツ」など，学校現場の厳しい現状は，派遣職員の中でも話題となりました。そんな中，様々なバックグラウンドを持つ家庭が集まる日本人学校にいるうちに，ふと次のようなことを思いました。

「家庭，地域，友人という集団があるということは，そこに一つの『国』があり，そこで生まれる文化，価値観がある。それらは，当然違っており，それらを認めながら，互いによい影響を与えあえるよう考え，行動することが，自分の役目の一つである。」

教師としても，人間としても，まだまだ学ぶべきことが山積している私ですが，新しい発見をするための羅針盤をこの4年間で手に入れたように感じました。最後に，サンホセ日本人学校の児童生徒，保護者，在コスタリカ邦人のみなさん及び派遣活動のために，理解，協力をしてくださった皆さん，そして，何より，私の家族に深い感謝の意を表します。

在外教育施設，国際理解教育の推進について

前中国広州日本人学校
ひたちなか市立市毛小学校
教諭 佐竹 秀貴

私は平成18年4月から平成21年3月まで，中国の広州日本人学校に赴任してまいりました。日本人学校の教育活動や三年間の国際理解教育に関する取り組みについて，体験してきたことを少しでも多くの方々に知っていただけたらと考えています。



広州日本人学校について

広州日本人学校は，昭和57年10月に開校した「広州補習授業校」が前身で，当時は日本総領事館のあるホテルの一隅を借りて授業が行われていました。平成7年に広東省教育庁より日本人学校としての開設許可があり，日本人学校がスタートしました。

平成17年には新校舎や新グラウンドが完成し，児童生徒数は小学部が194名，中学部が42名の236名となりました。その後の3年間で，児童生徒数が大幅に増え，小学部が約240名，中学部が約60名の計400名になりました。3年間で約160名の増加です。

(1) 言語活動について

広州日本人学校では，現地の言葉(中国語)を各週1時間，3年前から朝の時間を活用して，英語活動を行ってきました。中国語は現地の日本語学科を卒業した中国語の教師が学校に来て，進度の違う児童生徒に丁寧に言葉を教える様子が見られました。また，朝の英語活動では，楽しみながら歌やゲームに取り組みました。



中国語を教えてください，陳先生です。毎時間教材を用意してきて下さり，楽しくそして分かりやすい授業を展開していました。小学校

1年生から中学校3年生までの幅広い学年の指導も丁寧に行っていました。



英語を教えてください，イボヌ先生です。クラスからは明るい歌声や，楽しそうな笑い声が多く聞こえました。楽しみながら英語に触れる

指導は大変勉強になりました。平成20年度からは，英語の時間が各週2時間になり学習の内容も深まっています。

広州日本人学校では，新しい教育課程に基づき，平成20年度から時間割を作成し，小学1年生から4年生までは英語教育を週1時間。5年6年は週2時間。中国語会話は小学1年から中学3年まで週1時間行っています。学校全体で言語活動に力を入れています。

(2) 現地との交流について

広州日本人学校では，年に2回現地との交流会を行っています。小学部は現地の小学校との交流，中学部は日本語学科を専攻する大学生との交流です。お互いの文化や伝統を紹介する目的で行い，この交流会に向けて各学年では準備を進めます。相撲やお茶，カルタやあやとりなど，各学年で紹介する内容を決めて交流会を行っています。

< 広州日本人学校での交流会 >



3年 ことわざカルタの様子



5年 相撲の様子



6年 お茶の様子

3年生のこたわぎカルタでは、日本のこたわぎを中国語に訳し、日本語や中国語でこたわぎを読み、カルタ取りを行いました。5年生の相撲では、相撲の歴史やまわしの巻き方、相撲のルールなどを事前に説明し、相撲をとりました。6年生のお茶では中国茶の歴史やお茶の入れ方を紹介していただいた後に、校内の和室で抹茶や和菓子について説明し、お茶を一緒に飲みました。

右の写真はろくろを使いながら、実際に陶器を作っている写真です。焼きがまは長い歴史があり、古くから沢山の陶器が作られていました。ここでの交流会は、実演を見た後で、一緒に器の製作を行いました。知っている言葉を使ったり、身ぶりや手ぶりで会話する様子が印象的でした。



中学部 日本語学科を専攻する大学生との交流会では、自己紹介を中国語で行い、その後で総合的な学習と関わりを持たせ、中国の経済についてや、環境問題、孫文など歴史的な人物、オリンピックについてなどを話し合いました。後半は、お互いに自由に話す時間を設け、学習した中国を使ったり、普段関心を抱いている事について、自由にコミュニケーションを図りました。



(3) 中国の文化・伝統を学ぶ会について

広州日本人学校では、中国雑伎、広東オペラ、太極拳の演舞を隔年で行っています。ここでは、体験的な活動や素晴らしい演技の数々を鑑賞することができました。

< 中国雑伎の様子 >

下の写真は中国雑伎の演技を鑑賞したときの写真です。数々の技に児童生徒も感心していました。演技の最後には、簡単な技に挑戦する活動もあり、舞台の上で熱心に教わる表情が大変印象的でした。



< 中国雑伎 >

< 体験的な活動 >

< 広東オペラの様子 >

右の写真は広東オペラの写真です。剣や棒、扇の演技を鑑賞しました。最後には、実際に衣装を着させてもらう体験活動もありました。中学3年生の男子生徒が恥ずかしそうに化粧をしてもらった姿が印象的でした。



< 広東オペラ >

< 体験的な活動 >

(5) 朝の集会、生き方講演会

中学部の朝の集会では、各学年から一人、関心のあるテーマについて発表する「言の葉」集会が毎週行われます。自分の意見をきちんとみんなに伝えること、いろいろな人の考えを知ることが目的です。発表後には先生からの講評もあります。生徒たちは、「受験について」や「よりよいストレスの解消法」、「学習方法について」などテーマを決めて発表していました。また、生き方講演会では、中国の広州市で働いている日本の方々から話を聞

き、職業に対する思いや経験談、生き方について話を聞くことができました。

下の写真は朝集会と生き方講演会の写真です。朝の集会では、各学年一人、5分程度でみんなに伝えたいことを調べ、発表します。聞く生徒は、声の大きさや分かりやすさ、発表態度などについて評価します。発表者は全員からの評価やコメントをもらい、発表を振り返ります。



朝集会の様子

生き方講演会では、幼稚園や全日空などで働く方から話を聞き、仕事に対する思いや、考えを知ることができました。



生き方講演会



(6) 進路指導について

中学を卒業すると生徒たちは、インターナショナルスクールに進学するか、現地校に進学するか、日本に帰国して日本の高校に進学するかを決めなければなりません。中国の中で日本の高校についての具体的な資料を収集する活動はやはり難しく困難です。そこで、生徒たちは中学2年の夏休みから、日本の高校説明会や体験活動に積極的に参加し、情報を集めます。多様化する高校の中で、いかに自分にあった進路を決めるかが課題でしたが、保護者と学校、生徒がそれぞれ協力しながら、納得のいく進路を決定することができました。



右の写真は、高校説明会の様子です。

各高校の説明を聞いた後、生徒一人一人が関心のある高校の入試情報について質問をしました。帰国子女の受け入れ状況や試験科目、卒業後の進路状況など質問の内容は様々でした。保護者の方々への説明も同じ日に行われ、高校の情報をみんな熱心に聞いていました。



(7) 現地の教育事情について

3年間、中国の教育事情をテーマに現地の教育を調べてきました。目覚ましく発展を遂げる中国国内での教育事情は年々変化し、高い学力を目指す試みが多くクローズアップされてきています。生徒数が1300名や1800名の規模をほこる学校も多く、ひとクラス50名という人数で進める授業でも生徒たちは真剣なまなざしで、ひたむきに学習に取り組んでいました。教師達は専門機関や他の学校に積極的に研修に行き、経験をもとに論文をつくり、日々研究に励んでいました。「教育の質と量を考え、学んだことをより優れたものにする」という考え方や「学生は学ぶほど勉強がしたくなり、教師は教えることを学ぶほどそれを生かしたくなる」という言葉が大変印象的でした。

(8) 終わりに

広州市は鳥インフルエンザ（や反日運動があったりと赴任前は色々不安となる問題が沢山ありましたが、オリンピックの影響からか、この3年間は社会情勢が比較的安定しており、大きな問題もなく過ごすことができました。

現地に赴任した当初は広東語と中国語しか言葉が通じないこの土地で、上手く生活していくことができるかが心配でしたが、周りにいる日本の方々に支えられながら、少しずつ言葉や文化などを理解し、なんとか3年間の任期を全うすることができました。日本という慣れ親しんだ国から出ることにより、日本の良さが分かり、恵まれた環境であったことを改めて実感しました。目覚ましく発展を遂げる中国での3年間は、学ぶことが沢山あり、ここで得た経験はこれからの生活や教育活動に生かしていきたいと考えています。

アメリカと日本の教育制度の比較検討
～レイクビュー学校区の科学教育カリキュラム調査を通して～

前バトルクリーク補習授業校
つくば市立竹園西小学校 根本紀男

1 テーマを選んだ理由

アメリカの学校教育制度は日本と大きく違い、教育行政はアメリカ連邦政府でなく各州に委ねられている。さらに、地域の学校区の裁量で決定できる範囲がかなり広く、使用する教科書やカリキュラム、始業日、終業日、休日なども学校区で定められている。ここバトルクリークに住んでいるほとんどの日本人の子どもたちが通うレイクビュー学校区の教育制度を正しく理解しておくことは、とても重要なことであり、また補習校に通う子どもたちへの指導にも大いに役立つものと考えられる。

特に、レイクビュー学校区を中心とするこの地域では科学教育に力を入れており、その成果が現れてきている。現在、日本では理科離れが問題であるといわれて久しいが、その解決の糸口を見つけることも可能であると考えられる。

2 アメリカ(レイクビュー学校区)の教育制度について

アメリカの学校教育制度は日本と大きく違い、教育行政はアメリカ連邦政府でなく、各州に委ねられている。州教育庁・教育委員会の下には教育局、その下に学校区がある。日本とは異なり学校区の裁量で決定できる範囲がかなり広く、使用する教科書やカリキュラム、始業日、終業日、休日なども定められる。ここバトルクリークで、日本人のほとんどの子どもたちが通う学校はレイクビュー学校区管轄内にある。平成18年(9月より)に、レイクビュー学校区では大規模な学制変更が実施された。

大きく変わった中学校のしくみ

2005年12月に高校の校舎を新築したのに伴い、レイクビュー学校区では複雑になっていた学制(4・1・2・5)を、2006年9月より小・中・高、4・4・4年制へと、すっきりとした形に改正した。特に、大きく変更されたのが日本の中学校にあたる部分で、これまでテリトリアルスクール(1年間)とジュニアハイスクール(2年間)とからなっていたものを、ミドルスクール(4年間)へと一つの学校に統合した。校舎も、旧ハイスクールが使用し

ていた校舎を改修して、4年間同じ学校(校舎)に通うことができるようになった。しかし、学校は一つになっても、ミドルスクール内では副校長が2人配置(校長は1人)され、それぞれ5、6年生と7、8年生を担当し、内容的にも2つの学校が同時に運営されているような形態をとっている。特に、5、6年生は学級担任の授業を中心とする小学校に近い形で運営し、7、8年生は教科担任制及び選択教科を多く採り入れた高校に近い形で運営している。それぞれ異なる2つの運営形態をもつ組織が1つの学校の中でうまく協調し、また子どもたちにとっては、同じ一つの学校の中で学級担任制から選択及び教科担任制へと、スムーズに移行できるように配慮がなされている。現在、日本では小学校から中学校へ、また中学校から高等学校へ進学するときの大きな壁になっている部分を、レイクビュー学校区ではこの学制変更という形でうまく改善していこうという考えが根底にはあるようである。

3 日本とレイクビュー学校区の科学(理科)教育課程の比較結果

- ・レイクビュー学校区では幼稚園の年中から科学教育が始まるが、日本では小学校3年生からである(小学1・2年生で学ぶ生活科の中に科学的内容は含まれているが・・・)。
- ・レイクビュー学校区では、幼稚園(年中・年長)教育から具体的な科学事象についての学習が段階的に始まっている。
- ・レイクビュー学校区では、小学1年生から観察・実験の基本的な内容“計測と分類について”の学習が始まり、そして“水のはたらき”、“地球”、さらには“環境”についてまで幅広く学習するようになっている。
- ・レイクビュー学校区では、すべての学年で“環境”について学習するようになっている。
- ・日本でもレイクビュー学校区でも系統的な扱いを重視しているが、日本の学校では理科の学習が始まるのが小学校3年生からで、そのためにたくさんの内容を、それも多岐にわたって学習していかなければならない。
- ・日本の学校では、小学校高学年になるとたくさんの内容について、それも多岐にわたって学習する(例:小4年では10項目)必要があるが、レイクビュー学校区では学年ごとに大きなテーマ(例:小4年では4項目)が決まっており、幼稚園から小学校

全体を通して学習していくことでいろいろな内容を学んでいけるようになっていく。

- ・日本でもレイクビュー学区でも物理的な内容、地学的な内容、そして生物学的な内容を中心に学習内容が配置されており、化学的な内容はほとんど取り扱われていない。
- ・日本では“身近な自然に興味関心をもつ”とか“を調べる”というような探求活動が中心になっているが、レイクビュー学区では“を説明する”とか“を証明する”というように、どれだけ探求が深まっているかを問う学習活動が中心となっている。

4 科学教育特別カリキュラムについて

アメリカの中学校、高等学校では、ほとんどの教科が選択制になっている。数学や科学の各教科も生徒の興味関心に応じて入門編から応用編まで自由に学ぶことができるように配慮されている。そうした環境の中、より専門的な内容の授業を受けたいという場合には、バトルクリーク地域のマス・サイエンスセンター(以下BCAMSC)のカリキュラムを選択することも可能となっている。受講するためにはある程度の学力と入校のための試験に合格する必要があるが、それぞれ地元の中・高等学校では対応できないような高度な内容の授業(実験や研究)を受けることができる。また、このカリキュラムを受講した卒業生は、全米の有名大学へそれぞれ進学し、各分野で活躍している。

5 バトルクリーク地域マス・サイエンスセンター(BCAMSC)について



(1) 名称

Battle Creek Area Mathematics and Science Center (BCAMSC)

(2) 所在地

765 Upton Avenue, Battle Creek, MI 49015-4850

(3) 設立 1990年 1995年に初めての卒業生を送り出す。

(4) 目的 ミシガン州にある33校のうちの一つのセンターで、州法律によって定められている。

- | | | |
|---|-------------------------|----------------|
| 1 | リーダーシップ | 漠然としていて難しいが・・・ |
| 2 | 現地校教師のための理数科カリキュラムのサポート | |
| 3 | 理数科教師のための教材開発及びトレーニング | |
| 4 | 中高生に対する理数科の専門的指導 | |
| 5 | リソース情報センター | |
| 6 | 地域社会参加 | |



理数科教師のための教材開発及びトレーニング



中高生に対する理数科の専門的指導

(5) 校長 Chris Lapekas

2002年より勤務

(6) 職員数 26名

カリキュラム作成: 2名,

教材準備6名(フルタイム2名, パートタイム4名)

(7) 在籍数 350名(各学年108名定員)

在籍生徒数は学区ごとに決められており、数学や科学の授業時間になるとスクールバスを利用して各地域の学校から登校してくる。レイクビュー学区からは在籍者の約20%の70名の生徒が在籍している(その中には日本人の生徒も数名在籍)。しかし、学年があがるにつれて、勉強がたいへんになるため辞めてしまう生徒もいる。4年目で10%程度の生徒

が脱落する。

(8) 経営

州や教育委員会から独立している。しかし、補助金はもらっている。また、ケログ（本社機能がバトルクリーク市内にある）やデンソー等の各企業から寄付を受けている。さらには、BCAMSCで開発した教材を州内の各小中学校へ販売し、多額の収入を得ている。在籍学生ひとりあたり州から7000ドルの補助ができるが、BCAMSCへ来るとその半額（3500ドル）が支払われる（あまり多くの学生が通うことになると教育委員会の収入が減ることになる）。

(9) その他

教材開発（ウイスコンシン州の学校「アインシュタイン」を参考）地域の小・中学校用の教材（観察実験用）開発をしている。ここで開発された教材（観察実験用）はミシガン州の25パーセントの学校（教育委員会）で利用され、各小・中学校において科学教育の質の向上に貢献している。また、その売り上げは、学校経営にも寄与している。

- ・ボックス1つ 350～400ドル
教師の講習もすべて含まれる。
- ・1年後に消耗品の入れ替え等 25ドル



観察実験用教材仕分けの為の部屋：
消耗品が各棚に整理して準備されている。



各学校へ配送を待つ観察実験用教材：
体育館に整理して並べられている。

6 なぜ子どもたちはBCAMSCを選ぶのか？
「なぜ子どもたちはBCAMSCを選ぶのか？」また「なぜ子どもたちが科学に興味を持つのか？」という質問を学校長にしてみたところ、次の3つの理由があるという答えであった。

科学を学ぶことはクール！（カッコいい）

ここでは、同じ専門分野に興味を持った友だちと一緒に、自分のしたい研究ができる。

専門的な知識を持った先生の指導が素晴らしい。

7 終わりに

日本では、理科に対する児童・生徒の興味・関心が低くなったり、授業における理解力が低下したり、日常生活において重要と思われる基礎的な科学的知識を持たない人々が増えていたりすると言われる一連の議論がある。科学的思考力や計算力の低下により、特に高等教育において授業の内容を理解できない生徒が増え、専門的知識・技能を有する人材の育成が難しくなることも大きな問題として指摘されている。このような状況から、いわゆる“理科離れ”ということばが使われはじめて久しい。

翻って、ここアメリカでは一般的に子どもたちのみならず大人も含めて科学教育に関する意識がとても高い状況がみられる。現地校へ在籍している日本人の子どもたちをはじめ、多くの優秀な子どもたちが科学教育の特別クラスに籍を置いて学習に励んでいる。また、アメリカでは技術者や研究者の社会的地位が高く、日本に比べて給与も恵まれた状況にある。BCAMSCのクリス校長が言うように、特別カリキュラムで科学を学ぶことはアメリカの生徒たちにとって「クール！（カッコいい）」なのである。

しかし、今日の日本において果たして科学を学ぶことを「クール！（カッコいい）」と感じる子どもたちはどれだけいるだろうか？残念ながら少数派であると思われる。資源が乏しい日本が今後も繁栄し続けるには、科学教育の重要性を改めて認識する必要があるのは言うまでもない。日本においても、BCAMSCのような生徒にとって魅力ある学習の場を提供し、そして科学を学ぶことの楽しさをしっかりと味わわせていく必要があると強く感じた。

【文献】

INNOVATION THROUGH
INSPIRATION (+DVD)
(Battle Creek Area Mathematics and
Science Center)
Alumni Updates
(Battle Creek Area Mathematics and
Science Center)
Information for Applicants and Parents
(Battle Creek Area Mathematics and
Science Center)

【訪問】

平成20年 9月 6日(土)
レイクビュー学校区・大会議室
(レイクビュー・スクール学校区セミ
ナーへの参加)
平成20年11月14日(金)
バトルクリーク地域 マス・サイエンス
センター
(授業参観, 施設見学, クリス校長に
よる説明)

国際理解教育実践報告

つくば市立竹園東小学校 中島 明美

1 はじめに

平成20年3月にバンコク日本人学校から帰任し、つくば市立竹園東小学校に赴任した。平成20年度は5学年を担当し21年度は6学年を担当している。海外教育施設での経験を日々の教育活動にどのように生かしていけばよいか依然として模索中である。その中で以下のような実践を行った。

まず、学級における国際理解教育の実践である。本年度の担当学級には、3名の外国人児童、2名の帰国子女、1名の海外生活経験児童がいる。これらの児童が、自分の国や自分が生活した国の文化や暮らしについて伝え合う機会をもつことは、とても身近な国際理解の場となると考えた。そこで、学級における「国際理解集会」を計画し実践した。

次に、外国語活動の実践である。本年度から本県では、5、6年生は年間35時間の外国語活動を行うことになっている。本校では、年間計画を作成しながらの実践であるが、隔週でAETと共に指導を行い、AETが来ない週は担任が指導している。その際、ICT機器を活用することも多い。

最後に、他学年のゲストティーチャーとしての実践である。20年度は、1学年の生活科「いろんな国のお正月」の単元で、タイのお正月や暮らしについてのプレゼンテーションを行った。21年度は、1年生の生活科に加え、2年生の生活科「世界の遊び」の単元でも実践を行う予定である。

2 実践報告

(1) 学級活動「友だちの国を知ろう」(平成21年7月実施)

ねらい

学級の友だちが生まれた国や生活した国の様子を伝え合う活動を通して、外国の生活や文化に慣れ親しむとともに、互いをより大切にしようとする気持ちを育む。

児童の活動

6名の児童が、自分の国や生活した国の出身国について「みんなに伝えたいこと」を新聞にまとめて配付し発表を行った。また、発表のときは地図や持ち物なども提示した。



児童	出身国・生活経験国	おもな発表内容
Iさん(男児)	インドネシア国籍	イスラム教について
Sさん(女児)	中国(四川省)国籍	中国のお正月の様子
Yさん(女児)	中国(上海)国籍	上海市街の様子
Iさん(男児)	海外生活経験(約2年:イギリス)	現地校での生活など
Uさん(女児)	帰国子女(約2年:イタリア)	ゴミ事情など
Oさん(男児)	帰国子女(約3年:タイ)	果物など

(2) 外国語活動

年間計画について

つくば市の「外国語活動」研究拠点校であるつくば市立東小学校の年間計画と文部科学省から提示された「小学校学習指導要領解説」及び「英語ノート」等を参考に作成している。

1時間ごとの活動について

つくば市では、5, 6年生の外国語活動に隔週でAETがT2として指導を行う。そのため1週間ごとに担任, 担任+AETによる指導を行っている。そこで次のような工夫を行いながら計画を立て指導している。

	指導者	単元の活動のおもな形態
第1時(1週目)	担任+AET	導入, ゲーム形式のコミュニケーション活動
第2時(2週目)	担任	ICT機器を使った活動, コミュニケーション活動
第3時(3週目)	担任+AET	AETとのやりとり, コミュニケーション活動
第4時(4週目)	担任	交流活動, ふりかえりなど

実践例(平成21年7月実施)

Lesson 4 “できることを紹介しよう”の第2時には、ICT機器を使って、音声やリズムなどに慣れ親しむ活動を行った。また、ゲームなどを通してすすんでコミュニケーションをとろうとする意欲を高めるように努めた。

(3) ゲストティーチャーとして

1年「きいてみよう みてみよう いろんなくにのお正月」(平成20年12月実施) ねらい

身近な人たちからいろいろな国の年末やお正月の様子について話を聞き、それらの国々についての理解を深める。また、日本の正月についても、いろいろな食べ物や飾り物などの意味を知り、新年を迎える気持ちを高める。

プログラム(参加児童 第1学年児童 119名)

内容	10:50	はじめのことば
	10:55	ボランティアの方の紹介
		外国の正月またはクリスマスについて
	11:35	お礼のことば
		おわりのことば
準備	・世界地図 ・プロジェクター ・スクリーン 等	
ボランティア	Eさん(ドイツ), Lさん(インドネシア), 中島(タイ)	



3 成果と課題

学級活動「友だちの国を知ろう」の活動後、児童の感想からは、「Iさんが毎日メッカの方を向いてお祈りしていることを初めて知った」「イギリスでは子どもだけでお留守番させると逮捕されることを初めて知った」「イタリアへ行ってみたい」「タイは果物がすごく安い」などの意見が聞かれた。また、発表した児童の中には、日頃自分からはあまり話をしない児童がいたが、今回の発表で活躍できたことがその後の自信につながったようである。この活動は、10月の外国語活動“行ってみたい国を紹介しよう”の単元につなぐことができると思われる。

外国語活動は本年度から始まり、まだ試行錯誤を繰り返しながら指導を行っているのが実情である。しかし、4月から7月までの実践を通して感じることは、6学年の児童が徐々に「英語で会話したい」という気持ちをもつようになってきた、ということである。この意欲を今後も伸ばしていくために、単元全体を見通した1時間ごとの授業の立案と実践に力を入れていきたいと考えている。

他学年のゲストティーチャーとしてタイの行事や暮らしなどについてプレゼンテーションを行う場合は、映像を取り入れたり具体物を用いたりして少しでも児童に興味をもたせるように心がけている。そのため、帰国してからも現在日本人学校で勤務している教員や現地スタッフなどの助けを借りることが多い。今後も、在外教育施設で得た経験を大切にすると共に、現地で得た友人とのかかわりを大切にしていきたいと思っている。

「地球ラジオ」の紹介

放送チャンネル：NHK第1放送（日本）、ラジオジャパン（海外）

放送内容：海外教育施設の児童の作文，テーマに沿った各国の事情，世界1周旅行の様子

放送日時：毎週土曜日，日曜日 午後5：05～6：50（生放送）

大相撲開催期間中は午後6：05から放送

あ と が き

ここに、2009年度の広報誌を第1号をお届けします。

会長の大塚校長先生、顧問の小出先生を始め、原稿をお寄せいただいた7名の先生方に感謝申し上げます。ありがとうございました。

「今年は20人もの先生方が在外教育施設から帰ってくる。たくさん原稿が集まりすぎて、広報誌が膨大なものになったら大変だな。」などと不安をかかえながら、メールを開きました。しかし、今年帰国された先生方も優しく、大した手間もかけずに、無事編集することができました。

集まった原稿の数を見て寂しく思うのは、私だけでしょうか。勿論、量より質が大切なのは言うまでもありませんが。しかし、よく考えてみると、あまり原稿が集まらなくなってきたのは、私の熱意が薄れてきたことの表れともとれます。今日から、心を切り替えて会の仕事や日々の仕事に取り組んでいこうと思いました。

また、日々の雑務に追われ、海外での生活が遠い記憶の彼方に去りつつある私にとって、この広報誌と毎月送られてくる「JICA MONTHLY」が私と海外を結ぶ接点です。

この広報誌が、帰国された先生方には海外との接点に、そして在外教育施設に派遣されている先生方には、日本との接点になってくれればいいなと感じながら編集しました。

広報誌は、下記のホームページアドレスでもご覧いただけるようになりました。興味のある方は、ご覧下さい。ホームページアドレス - <http://www.zenkaiken.net/~ibaragi/>

今後も「茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会広報誌SECO」をよりよいものにしていきたいと思しますので、広報誌に関するご意見がございましたら、広報・研修担当役員まで遠慮なくご連絡ください。なお、Eメールでのご意見は、下記のメールアドレスまでお寄せ下さい。Eメールアドレス (kouhouibakai@yahoo.co.jp) (文責 河嶋)

